

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

土方久功とモデクゲイ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-01-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 久夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009321

第Ⅱ部
附論

土方久功とモデクゲイ

清水 久夫

埼玉大学，法政大学非常勤講師

はじめに

- 1 モデクゲイの創設と教義
- 2 モデクゲイの頭目・コーデップとの出会い

3 久功の民族調査へのコーデップの協力

- 4 久功によるモデクゲイの調査
- 5 ペリリュウ行き
おわりに

はじめに

土方久功が、1929年（昭和4年）3月から1931年（昭和6年）9月まで、パラオに滞在していたとき、パラオではモデクゲイといわれる新宗教が盛んであった。「モデクゲイ」とは、「集結」の義で、当時は、北はカヤンガル島から、南はペリリュウ島、アンガウル島に至るまで広まっていた¹⁾。

この新宗教は、ドイツ領であったパラオを日本が占領した直後に生じ、医療、予言、理財などを特色とし、一時期多くの信者を集めた。その教義礼拝の様式には、伝統宗教とキリスト教が混在している。当時、日本の南洋庁は、この新宗教を厳しく取り締まっていた²⁾。

パラオで民族調査を行っていた久功にとって、モデクゲイは避けて通れないものであった。

久功は、パラオ本島（バベルダオブ島）中央部にあったアルモノグイ（ガムヌグイ、ガムルグイとも表記する）に石神の調査に入ったが、全く成果を得られなかった。「その理由はその様な石がないのではなくて、よい案内人を得られなかったからであります。」と述べている。さらに、久功は、当時の状況を以下のように説明している³⁾。

- ① 日本の役所が最近この地にあるカムセツ（カムセズ）部落に住んでいたモデクゲイの頭目的な人物を妻子共に、南方離島ブル島に流刑にした事。
- ② アルモノグイ（ガムルグイ）の人々は、久功のことを「神様しらべをする人間と考えた」ため、協力を得られなかった事。
- ③ 久功は、南洋庁によるモデクゲイの弾圧に対し批判的であった事。
- ④ モデクゲイが非常な勢力を得たため、古い遺物、遺跡に対する解釈が違ったものとなり、古い昔の神々が忘れられたり、正されたりして、見通し難いようなことが多い事。

小稿では、このような状況のなかで、久功はモデクゲイとどのような関係をもってパラオで民族調査を行ったのかについて、『土方久功日記』をもとにして述べてみたい。

1 モデクゲイの創設と教義

土方久功によれば、モデクゲイの創設者は、アルコロン（ガルゴロン）、アンリール部落のトモダツツという若者であった。昔は、家々の小神、悪神の類が信仰され、部落の神々である大神、善神は一向顧みられなかった。それをドイツ領時代の終わり頃、大神、善神の信仰を盛んにした。しかし、日本領になってから南洋庁の弾圧を受け、牢屋につながれ牢死した。トモダツツの死後、この運動を継承したのはアコール、ゲードン部落の第一長老コーデップ・エラ・ギラゴムクールと、アルモノグイ、カムセツ部落のタガルトヨゴの二人であった。しかし、タガルトヨゴは、妻子とともに南方離島、20人程しか住人のいないブル島に流刑に処されてしまった⁴⁾。久功が、パラオに滞在していたとき、このコーデップがモデクゲイの主導者となっていた。

久功によれば、モデクゲイの教義は、倫理道徳的な教えでもなければ、哲学的な主義主張という様なものではなく、悪神悪霊に対する消極的な、「恐れ」の信仰から一歩進んで大神善神に帰依して積極的に祈願し、善神に信頼して悪心悪気を恐れず近づけず、自らの幸運至福を神の恩恵と感じて感謝するというようなものだった⁵⁾。

ところで、当時のモデクゲイの教団組織がどのようなものであり、どれほどの信者がいたのであろうか。残念なことに、『日記』にはそれらについて、何も記されていない。恐らく教団組織は整っていないように思われる。教会のような恒常的施設はまだ見られなかった。したがって、集會も、個人の家等で開かれることが多く、10人程度の集まりであったようである。後に述べるペリリューで行われた饗宴が空前絶後のもので、97人がア・バイに集まったというが、それまではこれほどの大規模な集會はなかった、ということであろう。

既に述べたように、当時南洋庁は、モデクゲイを嚴重に取り締まり、主導者を遠流刑に処すなどしたが、取締の理由は何であったのだろうか。久功によれば、取り締まりの理由は、モデクゲイの信者は、働くことは神様の思召でないなどと言って怠けてばかりいる、神様へのお供えすると称して、毎日豚だの鶏だのを殺させて馳走ばかりしている、そして夜中まで歌をうたうから疲れて翌日は何もしないと、色々人心を乱すような予言をすとか、神様の名によって甚だしいものは金品を巻き上げるとか、あるいは女をなぐさみものにすとか言うものであったが、久功はいずれも全く当たっていない、と述べている⁶⁾。取締っていた南洋庁も、モデクゲイの実態を正確に把握してわけではなかった。そのため、取締の本当の理由はわからないところが多いが、恐らく、日本の支配下にある島民が、天皇以外の「神様」を崇めることが、南洋庁の役人達には許せなか

ったのではなかろうか。

2 モデクゲイの頭目・コーデップとの出会い

1929年（昭和4年）10月8日、久功はパラオ本島（バベルダオブ島）の北端に近いガラルドにある公学校へ、子供達に木彫の講習をするために来た⁷⁾。翌朝、学校へ行き、子供達と顔合わせをした⁸⁾。しかし、子供は12、3人しか集まらなかったため、助役、ルバク、巡警、青年団等を集め、年長のものも勧誘させた⁹⁾。11日からは子供達の講習が始まった¹⁰⁾。27日には、久功はトカイの家に行って話をした後、皆で浜を歩いてアコールに行き、ア・イムズールの家を訪れた¹¹⁾。当時、アコールはモデクゲイの本拠地であったが、この家の主、イックルケツはモデクゲイの有力者の一人であった。そして、石製遺物を収集していた¹²⁾。

11月7日の昼、トカイが久功の所へ、コーデップを連れて来た¹³⁾。これが、コーデップとの最初の出会であった。久功がガラルドへ赴任してから丁度一ヶ月経っていた。そして、翌週の土曜日にアコールへ行く約束をした。

約束より一週早く、9日の午後、久功はトカイとともに、アコールへコーデップを訪ねた。その日は、アコールに泊った¹⁴⁾。

既に述べたように、南洋庁はモデクゲイを厳しく取締っていたので、彼等は一ヶ月の間久功の行動を観察し、モデクゲイを取調べに来た人物でないと判断し、久功に接触してきたのであろう。すぐに二人は意気投合したようである。久功は、コーデップ・エラ・グラゴムケールのことを次のように評していた。

アコールのゴードン部落の第一長老で、40歳にならない壮年であったが、パラオのあらゆる古い伝説、神話ないし、古習俗等の伝承者としては第一人者であり、パラオの第一級の人物で、大きな結社の頭目として、多くの人間を心服させている点でも立派な人物と言ってよい。そして、久功の調査の大半は彼の案内、助力によるものであった¹⁵⁾。

このように、久功は、コーデップに対して、極めて高い評価を与えていた。さらに注目すべきは、久功の民族調査の大半がコーデップの協力によるものであると言っていることである。

3 久功の民族調査へのコーデップの協力

1929年（昭和4）11月22～24日に行ったマガンラン（マガラン）の調査¹⁶⁾、11月30日・12月1日に行ったガラスマオの調査¹⁷⁾にコーデップは同行し、多くの成果を得た。マガンランの調査では、コーデップ、トカイ等島民5人が同行した。11月30日から行われたガラスマオの調査では、コーデップを含む島民4人と、久功、杉浦佐助の計

6人で、舟2隻でガラスマオへ行くという大掛かりなものであった。これらの調査では、各の遺跡、遺物について事細かな説明が『日記』に記されているが、それらはコーデップによるものであった¹⁸⁾。また、『日記』12月4日の項には、5つの説話が収められ、7日には2つの説話が収められているが、これらは、コーデップが同行して行ったコンレイ、ガラスマオで採集されたものと考えられる。

カヤンガル島滞在中の1930年（昭和5年）8月19日、アコールからコーデップが来て、夕方、久功を訪ねてきた¹⁹⁾。そして翌日、コーデップと村の者達と南の海まで行き、Dirabakürüsの来たという岩の跡を調べた²⁰⁾。その夕方、皆を呼んでおいたが、村中の者達が家に入れないくらい大勢だったので、ア・バイへ行って、夕食をとり、kesekesをした²¹⁾。これだけの村人が集まったのも、コーデップの協力があつたためであろう。また、コーデップがカヤンガル島に居た間、久功はしばしば会って話を聞いた²²⁾。

10月14日に、久功は、再びガラルドのアコールへ行ったが、16日の晩、コーデップが村のルバクを6、7人連れてきた。久功は、彼等から昔のKomldir（葬儀）の話を聞いた²³⁾。その時に採集したと思われる説話が、幾つか『日記』に収められている²⁴⁾。

久功による「パラオ石神並に石製遺物報告」には、コロールからアングウル（ゲヤウル）まで13の地の石神、石製遺物について記されているが、注目すべきは、ガラルドとアルコロンの地についての報告が内容豊富で充実していることである（それに対し、既に述べたアルモノグイ（ガムルグイ）では、一つとして石神の類を見ることが出来なかった）。それは、ガラルド、アルコロンがコーデップが本拠としていた地の近くに位置し、調査にコーデップ等の協力が得られたからであると考えられる。

久功自身述べているように、久功の民族調査の大半が、コーデップの協力によるものであったことがわらう。

4 久功によるモデクゲイの調査

久功は、モデクゲイの協力を得て民族調査を行っていたが、はじめはモデクゲイとは一定の距離を保っていたように見える。しかし、カヤンガル島に滞在中、はじめてモデクゲイの集まりに参加した。1930年8月1日の『日記』には、

午後三時頃カラー一寸汐を浴びて帰ッテ来ルト、エラッウパンガ、皆が集ッテ居ルカト云ッテ迎ヘニ来タノデ Dülchūū ノ所ニ行ク。ケセケスト話ト。

と書かれている。これは、久功がモデクゲイの信者達の信頼を得たことを意味しよう。これがきっかけで、久功はモデクゲイに関心をもち、モデクゲイについて調べるようになったのである。そして、翌日も、夕方 Dülchūū の所に行き、ケセケストと話を聞いた²⁵⁾。

その翌日は日曜日で、彼等の祈祷日だったので、11時頃よばれて出かけた。祈祷日と言っても、皆が集まってささやかな食べ物を食べ、一日がかりでケセケスを歌うだけだった。しかし、この儀式を見るのが初めてだった久功は事細かに記録した²⁶⁾。

久功は、ことにケセケスに関心を持ち、その採集を始めた。『日記』には、次のような記載がみられる。

晩, Eramadaral ノ所ニ行き, kesekesū ノ意味ヲツケテ貰フ²⁷⁾。

晩, エラマタ[△]ライーノ所ニ行き kesekes 訳²⁸⁾。

しかし、8月22日から3か月近くの間、久功はモデクゲイの調査を中断しなければならなかった。22日の昼に「佐藤氏」がカモメ丸でカヤンガル島に来たからである²⁹⁾。久功は、「佐藤氏」と釣に行ったり³⁰⁾、一緒に酒を飲む³¹⁾ こともあったが、

佐藤君ガ居ルノデ、島民達ハ恐ガッテ日曜日ニ寄り集マル事モシナイ。ダカラ私達モ遊ビニ行ッテ話ヲキク事モ控ヘナケレバナラナイ³²⁾。

島民達は、ごく限られた日本人だけにモデクゲイの集まりに参加することを許していたのだろう。

1930年10月14日、久功はカヤンガル島を離れ、ガラルドのアコールへ行った。ここでは、コーデップの家に泊まった³³⁾。

12月21日、久功は再びカヤンガル島に渡った³⁴⁾。そこで正月を迎えたが、1931年1月16日朝、ボートでコーデップ達が来た。その夜は、早速皆集まってケセケスを歌った³⁵⁾。その後も毎晩のようにケセケスを歌っていた。

2月7日の『日記』には、

近頃ハトカイガ居ルノデ、毎晩ノヨウニ皆ガア・カラオニ集ッテケセケスヲヤッテ居ル。

と記されている。本島からモデクゲイの指導的立場の者が来ると、信者たちが集まり、ケセケスが盛んに歌われたことがわかる。

1931年4月10日には、久功は大島巡査を訪ね、コイグルの者から取上げたモデクゲイの結社表象と考えられる御霊代を見せてもらった³⁶⁾。

4月25日には、久功は、コロールを出てガラルドへ行った。この時の『日記』の記述には、注目すべきものがある³⁷⁾。

トカイノ家ニ入ルト、旅ノ終ッテ落ツイタ気ガスル。半分程ノ月ガ olbed ノ上ニ薄明リヲ

ナゲテ居ル。Bai カラ相変ラズノ踊の掛声ニユヅイテ歌ガ聞エテ来ルト、本当に、病氣ト蠅ト毒舌ト暑サト……、ゴツカヘシノコロールカラノガレテ、安全带ニ巡リツイタ気デユックリスル。

拠点を定めず、パラオ各地を転々と移動している久功にとって、ガラルドのトカイの家が、落ち着ける場所であると言っている。ガラルドは、モデクゲイの本拠であり、トカイは、モデクゲイの有力者の一人である。久功が、モデクゲイと深く関与していたことが推測される。

5 ペリリュウ行き

1931年5月10日、カヤンガルにいた久功は、杉浦佐助とトカイと共に3人で、本島のアコールにコーデップを訪ね、ペリリュウ行きを相談した。しかし、ガラオの道が出来るまで2週間位かかりそうなので、それまでは人夫に駆り出される。それが終わってから行くことにした³⁸⁾。

5月30日、日が暮れる頃、アコールからボートが来た。ボートにはコーデップとトカイ等いつも同行している者達4人に加え、子供達と女一人が乗っていた³⁹⁾。翌朝、ペリリュウに向かった⁴⁰⁾。ペリリュウに着いたのは、6月1日の午後だった⁴¹⁾。

6月6日の夜、久功はドイツ人牧師、レンゲがア・バイで布教すると言うので行ってきた⁴²⁾。

時を同じくして、モデクゲイの饗宴がガルヅロロゴの或る家で開かれた。久功は、自分かわりに杉浦佐助に見に行ってもらった⁴³⁾。

6月9日、「四尺バカリノ竹棒ヲモッタドウモウナ巡警ガトカイヲトガメ」、さらに他のアコールから来たモデクゲイの信者達との間でちょっとしたトラブルがあった。久功が行っても、なかなか治まらなかった。巡警は、かなり強硬であった⁴⁴⁾。

ア・バイでモデクゲイの大規模な饗宴が開かれる前日のこと、パラオ支庁の金井新吉書記官より手紙が届いた。伏田弥三郎パラオ支庁長が会いたいのので、次の便でコロールに来るように、とのことであった⁴⁵⁾。

12日の饗宴は、ガルゴル部落のア・バイで開かれた。久功は顔を出したが、あまりに大げさなので不快に堪えず、自分だけ途中で帰ってしまった。後で聞いたところでは、ア・バイには97名もの信者が集まったという⁴⁶⁾。この饗宴は、久功がモデクゲイの頭主コーデップをペリリュウへ連れて入ったので、その歓迎の意味で開かれたものだった。これは殆ど空前絶後のモデクゲイの饗宴であったという。駐在巡査には、事前に話をして黙許してもらっていたが、駐在巡査からは細大漏らさずコロールの支庁に報告され、数日後には、支庁から引上げを勧告されたという⁴⁷⁾。

16日、ペリリューを発ちコロールへ着いた久功は、夕方、伏田支庁長を訪問し⁴⁸⁾、翌17日には、金井書記官を訪ねた⁴⁹⁾。「日記」には記されていないが、モデクゲイとの関与が問題とされたのであろう。その夜、戸塚駿二病院長を訪問し、消燈近くまでいた⁵⁰⁾。

18日の晩には、杉浦佐助がコーデップ、トカイ、ギラガサオを連れて来たので、戸塚病院長を訪ね、消灯時間前まで話した⁵¹⁾。パラオの有力者であった病院長に、穏便に治めるように頼んだものと思われる。戸塚病院長は、医師でありながら、「民俗研究座談会」を主宰していたと考えられ、パラオの社会にも関心を持っていた⁵²⁾。

ところが、7月10日になって、夜中にコーデップ、イックルゲツ、エラカサオ、トカイの4人が訪れた。彼等が言うには、何でも、二三日前にアルクライが来て、マヅに、「先生と大工さんが神様の事を調べて訴えたので、今度は皆はひどい目に合うだろう」と言ったという⁵³⁾。

それで朝になってから、杉浦佐助は4人を伴いマルキョクへ行くことになった⁵⁴⁾。その結果については、『日記』には何も記されていない。ただ、この事件のために、久功はパラオを離れる決心をしたと思われる。モデクゲイの頭目コーデップ等の協力で民族調査を行うことが出来たのであるが、コーデップ等が処罰されるとなると、パラオでの調査は不可能となる。民族調査は、島民の信頼を得なければ、行えないからである。

7月14日に、自分の絵を全部、戸塚病院長の家に運び込んだ⁵⁵⁾。病院長に作品の保管を頼んだのであろう。7月25日、昌南倶楽部で展覧会を開いた⁵⁶⁾。これも、パラオを発つにさいしての、久功なりの「けじめ」であったのであろう。

8月5日、久功は、瑞鳳丸でトコベイ島などの離島を廻った⁵⁷⁾。次に滞在する島をどこにするかの事前調査であった。トコベイ島、メリール島、ソンソル島を廻った⁵⁸⁾。9月10日に、金井氏を訪ね、写真の現像を習った⁵⁹⁾。離島へ行く準備を着々と進めていたのである。

14日には、出航は9月20日と決まった。一緒に行くオジャレブルがカヤンガル島からコロールへ出てきた⁶⁰⁾。オジャレブルは、サタウル島出身の若者であったが、10年近く前、アンガウル島の燐鉍採掘人夫としてパラオに連れてこられたまま、パラオにとどまって、カヤンガル島でパラオ人のもとで暮らしていたのである⁶¹⁾。行き先は、サタウル島と決まっていた。

おわりに

久功は、パラオを離れ、サタウル島へ渡ったのは、文明の影響をほとんど受けていない、原始生活を続けている地を求め、その島で、「調べるものは調べ、集めるものは集め、教わるものは教わり、そして大工さんを相手に彫刻をする。」ためである、と述べている⁶²⁾。

しかし、久功がパラオを去る直接のきっかけは、モデクゲイ信者達の信頼を失ったことによると考えられる。パラオでは、もう調査を行うことは不可能となってしまった。それで、久功は、「新天地」を求め、サタウル島へ渡ったのである。そして、この孤島で7年間生活することになったのである。

註

- 1) 土方久功「パラオに於ける信仰的新結社に就いて」(『土方久功著作集』第2巻所収)、238頁。
- 2) 青柳真智子『モデクゲイ』(1985年、新泉社)4頁。
- 3) 土方久功「パラオ石神並に石製遺物報告」(『土方久功著作集』第2巻所収)28・29頁。
- 4) 土方久功、前掲、「パラオに於ける信仰的新結社に就いて」236・237頁。
- 5) 同上、238頁。
- 6) 土方久功、前掲、「パラオ石神並に石製遺物報告」28・29頁。
- 7) 『土方久功日記』(以下『日記』と記す)1929年10月8日。
- 8) 『日記』10月9日。
- 9) 『日記』10月10日。
- 10) 『日記』10月11日。
- 11) 『日記』10月27日。
- 12) 土方久功、前掲、「パラオ石神並に石製遺物報告」73頁。
- 13) 『日記』11月7日。
- 14) 『日記』11月9日。
- 15) 土方久功、前掲、「パラオに於ける信仰的新結社に就いて」237頁。
- 16) 『日記』11月24日。
- 17) 『日記』11月30日・12月1日。
- 18) 『日記』12月3日。
- 19) 『日記』1930年8月19日。
- 20) 『日記』8月20日。
- 21) 同上。
- 22) 『日記』8月21日、26日、27日。
- 23) 『日記』10月16日。
- 24) 『日記』10月29日、11月4日。
- 25) 『日記』8月2日。
- 26) 土方久功、前掲、「パラオに於ける信仰的新結社に就いて」251～254頁。
- 27) 『日記』8月18日。
- 28) 『日記』8月19日。
- 29) 『日記』8月22日。
- 30) 『日記』8月23日、26日、30日、9月7日、8日、他。
- 31) 『日記』9月6日、他。
- 32) 『日記』9月19日。
- 33) 『日記』10月14日。
- 34) 『日記』12月21日。

- 35) 『日記』 1931年1月16日。
- 36) 『日記』 4月10日。
- 37) 『日記』 4月25日。
- 38) 『日記』 5月10日。
- 39) 『日記』 5月30日。
- 40) 『日記』 5月31日。
- 41) 『日記』 6月1日。
- 42) 『日記』 6月6日。
- 43) 同上。
- 44) 『日記』 6月9日。
- 45) 『日記』 6月11日。
- 46) 『日記』 6月12日。
- 47) 土方久功、前掲、「バラオに於ける信仰的新結社に就いて」255・256頁。
- 48) 『日記』 6月16日。
- 49) 『日記』 6月17日。
- 50) 同上。
- 51) 『日記』 6月18日。
- 52) 戸塚院長は、1930年11月10日、コロールに滞在中の久功に、「民俗研究座談会」で報告してくれるよう頼み、久功は12日夜、昌南倶楽部で報告した。
- 53) 『日記』 7月11日。
- 54) 同上。
- 55) 『日記』 7月14日。
- 56) 『日記』 7月25日。
- 57) 『日記』 8月5日。
- 58) 『日記』 8月7日～15日。
- 59) 『日記』 9月10日。
- 60) 『日記』 9月14日。
- 61) 土方久功「流木」I（『著作集』第7巻所収）16・17頁。
- 62) 土方久功「わが青春のとき」（『著作集』第6巻所収）235頁。

(附記)

本稿作成にあたっては、国立民族学博物館須藤健一館長の御助言を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

